

シンポジウム 1

FD×SDで向き合う新しい学び ——学び手ひとりひとりの成長と 幸せに寄り添う大学教育を探る——

報告者

- 井上 雅裕 氏 慶應義塾大学大学院 システムデザイン・マネジメント研究科 特任教授
／芝浦工業大学 名誉教授（元副学長）／大正大学 招聘教授
- 松下 佳代 氏 京都大学 教育学研究科 教育・人間科学講座（高等教育学コース）教授
／大学教育学会 会長
- 宮越 敬記 氏 京都市立開建高等学校 教頭

コーディネーター

- 築地 達郎 氏 龍谷大学 社会学部 コミュニティマネジメント学科 准教授

FD × SD で向き合う新しい学び —学び手ひとりひとりの成長と幸せに寄り添う大学教育を探る—

コーディネーター

龍谷大学 社会学部 准教授 築地 達郎

○本シンポジウムのねらい

本シンポジウムをコーディネートするに当たって、問題意識は2つあった。

1つは、いわゆる「学び手主体の学び」の段階はそろそろ終わり、「学び手ひとりひとりが自ら『編成』する学び」を実現しなければならない段階に入りつつあるのではないか、ということである。

そしてもう1つは、高等教育機関の学び手が二十歳前後の若者だけに限られてきた状況はいよいよ終焉を迎えるのではないか、ということである。高等教育機関は、「生涯に亘って学び続ける」存在に対して学びの場を提供する責務を具体化しなければならないのではないか。

これら2つの論点は相互に絡み合う。学び手自身が生涯に亘って自ら学びを編成するからには、いつ、どこで、どのように学ぶかは学び手ひとりひとりに委ねられるであろう。だとすると、高等教育機関の側は、場所や時間に縛られない学びの場を、組織的に再構築していく必要に迫られるであろう。大学人は互いに手を携えながら、教学内容の質的改善、教育プロセスの構造的改革、そして情報化が急展開する時代にふさわしい学習インフラの整備などに総合的に取り組む必要に迫られている。「FD × SD」という新たな“しつらえ”にふさわしい、難易度の高い課題がはっきりと見えるようになってきたといえるだろう。

以上のような問題意識を踏まえ、当シンポジウムでは3つの重要な「現実」を、3人の先生方にご報告いただくことにした。

まず、MOOCs（大規模公開オンラインコース）およびマイクロクレデンシャル（細かく区切られた領域ごとの学修成果の証明制度）に関する研究と実践の第一人者である井上雅裕先生に、マイクロクレデンシャルによる学修成果証明制度が世界的にはごく当たり前導入されている実態をご報告いただいた。おそらく、日本の大学人が常識としてきた単位制度は、もはや旧くなり始めている。

教育社会学者として日本と世界の高等教育を多角的に分析し続けてきた松下佳代先生には、近年継続的に観察し続けておられる米国ミネルバ大学の教育思想と教育システム、そして最新の状況をご報告いただいた。ミネルバ大学はキャンパスを持たず授業はすべてオンラインで行う一方、学生たちは世界の複数都市における合宿を4年間かけて繰り返しながら学ぶという独自の教育モデルを導入して、大学関係者に強烈なインパクトを与え続けている。

探究学習を通じた中等教育改革の最前線で活躍されている宮越敬記先生には、高校段階において質の高い探究学習を実現するための環境づくりと教育システムについて、京都市立開建高等学校の事例をご報告いただいた。開建高校は、「堀川の奇跡」以来京都市教育委員会が取り組んできた高校再編の最終到達点として注目されている。

3人の先生方からの報告を通じて、私たち日本の大学人に染みついた時間感覚、空間感覚、そして制度感覚をリセットする機会を得ていただければ幸いである。

○報告の概要

報告①

井上 雅裕氏（慶應義塾大学大学院特任教授、大正大学招聘教授、JV-Campus/JMOOC マイクロクレデンシャル共同 WG 発起人）

「マイクロクレデンシャルの国内外の最新動向—生涯にわたる多様な学びの実現—」

これからの大学は新たな高等教育モデルを追求していくことになる。具体的には①オンラインを活用する大学間連携・国際連携・産学連携②学習機会の保証と生涯に亘る継続的な学びの実現③ハイブリッド型教育の質保証の仕組み④柔軟な単位制度とマイクロクレデンシャル⑤学習履歴証明書のデジタル化——が同時並行で展開していく。

こうした新たなモデルの下では、学生たちは世界各地の特色ある大学が提供する教育内容を、MOOCs

を含めたさまざまな手段で学んでマイクロレデンシャルの形で学習履歴を積み重ね、それに基づいて最終的に学位を得ることになる。マイクロレデンシャルとは、従来の学位よりも小さな区分で特定のスキルやトピックに重点化した、「授業内容のまとまり」である。各大学はマイクロレデンシャルごとに質保証を目指し、学生はそれぞれのキャリア目標など沿ってこれらを組み合わせ、自らの学びを編成していく。

マイクロレデンシャルが一般化すると学生の大学間の流動性が高まり、学びのプロセスや学位のあり方が変わる。それによって、大学教育やリカレント教育の大きな変革が始まる。すでに欧米諸国で導入されてきたが、近年はアジア諸国でも導入が進みつつあり、日本だけが取り残された形である。

たとえばタイでは2019年、教育省による「単位銀行」の制度が発足し、学生がさまざまな教育機関で学んだ学習履歴を国が保証する仕組みを整えた。国の単位銀行は別に各大学が単位銀行を設け、デジタル的に連携している。学生は国の保証の下、所属する大学から学位を取得する。

日本においてこうした制度の導入が遅れている背景には、デジタル化の遅れとともに、「自前主義」という文化の問題がある。また、社会人学生への向き合い方が弱く、リカレント教育への対応が不十分である。その結果、私立大学の過半が定員割れという現実に対して、有効な手立てが打てていない。

こうした状況への対応策として、オンライン教育を活用して各教育機関の得意分野を共有する。そして、マイクロレデンシャルを媒介に、学習者と教育機関との間の生涯に亘る継続的な関係を維持することが求められるのではないだろうか。

今後、リカレント教育、マイクロレデンシャルを開発し実施する教員を大学として正当に評価するしくみを設ける、学修歴の（卒業証明書、成績証明書、履修証明書）デジタル化を推進する、大学の内部質保証にリカレント教育やマイクロレデンシャルを公式に組み込み自己点検評価の対象として公表する——といった対応が求められるだろう。

報告②

松下 佳代氏（京都大学大学院教育学研究科教授、大学教育学会会長）

「キャンパスから自由になる大学の学び—ミネルバ大学の事例を中心に—」

世界的に注目されているミネルバ大学は自前のキャンパス・教室は持たず、授業はフルオンラインで行われる。しかしいわゆる「オンライン大学」（インターネットを利用した通信教育制の大学）ではない。キャンパスなどの空間には囚われないが、むしろ「場所に根ざした教育（place-based education）」は極めて重視している。学生たちは世界の7都市をキャンパスとし、これらを移動しながら学ぶ。そこでの教員と職員との役割は何であろうか。

同大の教育の特徴は、オンラインの正課教育と、経験学習の場としての準正課・課外活動との「ハイブリッド学習」を実現している点にある。そのために、4つのコアコンピテンシー（汎用的能力）を定めたうえで、これらの中から計約80個の「知の習慣と基本的概念」（HCs = habits of mind & foundational concepts）を抽出している。学生は正課教育の中でこれらのHCsを修得しつつ、滞在都市での多様な他者との協働による準正課活動の中でも活用していく。1年次に学習したHCsは、その後の3年間現場で活用しながら学び続け、その学修成果は数年後に事後的に評価する仕組みである。HCsは一つ一つが汎用的能力の基礎単位であって、学生はこれを手がかりにすることによって自分が何をどのように学ぶべきかを把握することができる。HCsの仕組みがあるからこそ、「都市をキャンパスに」というもう一つの学びのコンセプトが生きてくる。

こうしたミネルバ大学の教職員に求められるものは何であろうか。

まず教員は3年任期（最長6年）で、任期中は教育専念が求められる。採用時には3週間の「非常に厳しいトレーニング」を受けて授業法や評価法を習得しなければならない。

より重要なのは職員だ。滞在都市には複数名の学生生活スタッフと都市ディレクターが常駐し、①学生の健康や生活上の安全確保（課外）②都市での経験学習のサポート（準正課）③「居住地に根ざした課題」のサポート（正課）——を実施している。多様なバックグラウンドと高いソーシャルスキルをもつ、滞在都市での文化・歴史に通じていて豊富なネットワークをもっている、といった高い資質が求められる。

教職員はそれぞれに専門性を追求するとともに、オンラインとローカルを融合させて教職協働によって学生の高度な学びを実現しているといえる。

ミネルバ大学の成功は、日本の大学にも既に影響を与えつつある。2022年の大学設置基準改正において「遠隔授業の60単位上限」「校地・校舎面積基準」などが適用除外されたのはその一例だ。また、通信制では「ZEN大学」「さとのば大学」、通学制では「清泉女子大学地球市民学科」が、それぞれの方法で「場所に根ざした教育」を実現しようとしている。大学入学者の減少に直面する日本において我々がめざすべきなのは、ミネルバ大学の事例の表面的な模倣にとどまらず、自分たちの持つ資源とテクノロジーを最大限に活用して「新結合」(＝イノベーション)を生み出すことなのではないか。

報告③

宮越 敬記氏(京都市立開建高等学校教頭)

「高校の探究活動はここまで進化／深化している!？」

令和5(2023)年度に開校した開建高校は、京都市立の10高校について平成11(1999)年度から進められてきた一連の学校再編成の最後の事例である。新しい普通科系高校の創設を目指し、「その他の普通教育を施す学科」である「ルミノーション科」1科を設置して開設された。「自ら考え、自ら学ぶ力を育成する学校」であり、学校側が定める校則はない。入学試験の得点だけを意識した視野の狭い受験勉強に注力するのではなく、生徒自身が興味・関心を活かして学び、創造力や問題解決に必要な柔軟な思考力、豊かな人間性等を主体的に学ぶ取り組みに注力している。

募集定員は240名で、1クラス80名の3クラス編成とした。各クラスには担任が3名ずつおり、協働してクラス運営にあたる。また、各教科の担当も原則3人ずつとし、授業内容は3名で話し合いながらつくっていく。

教室の構造も全く新しくした。普通教室4個分の広さ(16m×16m)の教室で80名が学ぶ。必要に応じて教室を区切ることもできる。多様な形態がとれる新しい学習空間で、「生徒の数と同じ数の学びと進路がある」という考えのもと、生徒自身が設定した目標に向かって、自分に適した方法で学ぶスタイルを生徒と教員でつくる。

こうした基本理念と教育スタイルとは密接に結びつき、「問いから始まる学び」を実現しようとしている。

探究学習においてはまず、さまざまな社会課題や社会の現場に対して、生徒が学ぶ各教科・科目の学びの視点から俯瞰して捉えてみる活動を行う。それをふまえて京都に拠点を持つ企業や大学などの現状認識や問題意識に触れ、それらを「考える素材」として「考えるべき課題」を見つける。そして、そうした課題を解決するためのアプローチを生徒自らが考えて、調査活動や思考実験などを展開していく。

生徒は調査活動などを通じて最初に立てた問いを棄却して新たな問いに出会うことが少なくない。それを繰り返すことを通じて、誰かが立てた問いではなく、「この生徒だから出てきた問い」にたどり着くことができる。そのような学びに没頭する生徒たちに対する大人の関わり方は、①大人が「正解」を求めないこと②時間に間に合わそうとしないこと③適切なフィードバックをすること——だ。

次に、質の高い探究を行うための工夫として生まれた、「開建コアスキルカード」という教材を紹介しておきたい。

探究活動の大分類は「探索」「分析」「解釈」「表現」だが、これをさらに細分化して16「コアスキル」として整理し、カードゲームのカードのようなツールにした。生徒はこれらのカードを手札としながらワークショップを行い、課題の分析や解決方策の検討に用いている。また、各教科の授業や諸活動においてコアスキルを参照した声かけや指導を行うことで、探究の時間のみに使うものではなく、また、日常で必要なスキルだということを実感させるようにもしている。

大学での学びとの接続を考えてみたい。従来は「高校では探究、大学に入ったら研究」という切り分けがされてきたが、実は探究学習は、中学校から大学(学士課程教育)に至るまで長い学齢期に亘って適用可能であると思われる。高校で探究学習に没頭した生徒にとっては、大学で改めて講義系授業にしばらくつけられることには違和感を覚えるようだ。高校から大学への接続時期よりおそい大学2年次～3年次くらいに仮説検証／仮説生成型の「研究」に移行したほうがいいのではないか。

○報告に対する質疑ならびに全体討議の内容

全体討議で話題になったのは、井上氏が報告した「マイクログレデンシャル」、松下氏の報告にあったミネルバ大学の「HCs」、そして宮越氏の開建高校における「コアスキル」という3種概念に共通性が高いことであった。いずれの場合も、学習の目標と評価軸を汎用性のある基礎単位に落とし込み、それらを自由に組み合わせて自分らしい学びを実現するための基盤としている。

一方で、これらの基礎単位を自分のためにまとめ上げていくための方向付けを担うのは、ミネルバ大学の「土地に根ざした教育」や、開建高校の「地元の現場において自ら立てる問い」である。ここにも高い共通性がみられた。

こうした学びの基盤を、個々の学校に閉じ込めず、学び手が生涯の学びとして編成していくためには、それぞれの学修成果を可視化し、持ち運び可能なものとする必要がある。討論では、そのために必要なもう一つの基盤としての「フレームワーク」の重要性が議論された。すなわち、データセキュリティを実現する情報基盤である。井上氏が報告で強調したように、近隣諸国をはじめ多くの国・地域でこうした情報基盤は既に実用化されているが、日本は取り残されている。このことについて、強い問題意識が共有された。

会場からは、eポートフォリオを個々の学び手が継続的に利用できることの重要性が指摘された。現在は学籍番号が学校間で非連携となっていて、eポートフォリオは途切れ途切れになってしまう。これを受けた討論では、「学習履歴は学生のもの」という理念を確立していくことが必要であることが確認された。

スライド1



大学コンソーシアム京都
第30回FD・SDフォーラム
2025-3-1

マイクロクレデンシャルの国内外の最新動向 －生涯にわたる多様な学びの実現－

井上 雅裕
慶應義塾大学大学院 特任教授
大正大学 招聘教授

JV-Campus/JMOOC マイクロクレデンシャル共同WG発起人

©2025 Masahiro Inoue

1

スライド2

井上 雅裕 (INOUE Masahiro)

博士(工学)、技術士(情報工学部門)、シニア教育士(工学・技術)
PMP(Project Management Professional)
e-mail: inouem@keio.jp

略歴:

1980年 早稲田大学大学院 博士前期課程(修士) 物理学及応用物理学専攻修了
1980年4月-2005年3月 三菱電機株式会社、同社 住環境研究開発センター部長を歴任
1990-1991年 米国ミシガン大学客員研究員
2005年4月-2021年3月 芝浦工業大学 システム理工学部 教授
2017年1月より 一般社団法人 PMI日本支部理事
2017年6月-2021年3月 芝浦工業大学 副学長(国際連携、産学連携担当)
2017年6月-2024年6月 公益社団法人 日本工学教育協会理事、国際委員長
2021年1月より ISAL (Institute of Systems, Arts and Leadership) 代表
2021年4月より 慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科 特任教授
2021年4月より ウニベルシタス研究所 主席研究員
2021年6月より 芝浦工業大学 名誉教授
2024年7月より 大正大学 招聘教授
所属学会、協会: PMI日本支部理事・教育国際化委員会委員、JV-Campus MC専門部会委員、JMOOC マイクロク
レデンシャルWG副主査、マイクロクレデンシャル共同WG発起人、一般財団法人オープンノバネットワーク理事、
IEEE Senior Member、情報処理学会会員、日本リーダーシップ学会会員、日本教育工学会員



2

スライド3

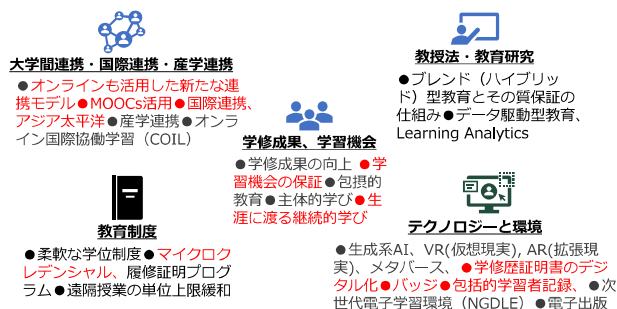
目次

1. これからの高等教育のモデル
2. マイクロクレデンシャルの定義と高等教育へのインパクト
3. マイクロクレデンシャルの学習者と求められる条件
4. マイクロクレデンシャルの国内外の最新状況
5. 国内外で通用するマイクロクレデンシャルの実現
6. 課題と対応策
7. 参考文献

3

スライド4

これからの高等教育のモデル

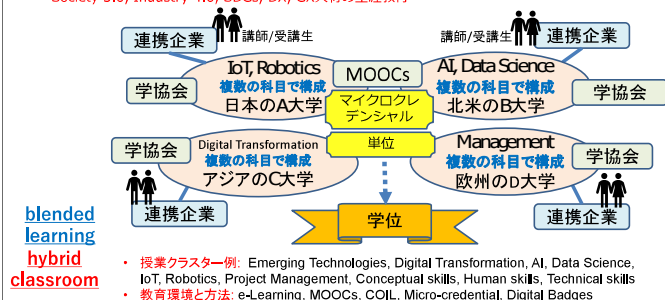


©2022, 2024 Masahiro Inoue

スライド5

大学・企業・学協会・MOOCsの国際連携での教育のエコシステム

Society 5.0, Industry 4.0, SDGs, DX, GX人材の生涯教育

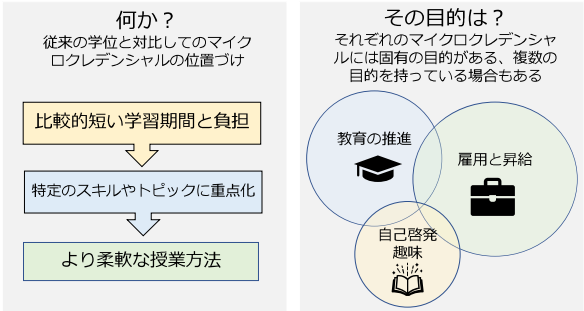


5

スライド6

マイクロクレデンシャルの 定義と高等教育へのインパクト

マイクロクレデンシャルとは何か？ その目的は？



Source: Micro-credential innovations in higher education: Who, What and Why, OECD Education Policy Perspectives No.39, 2021. から作成（井上）

マイクロクレデンシャルの高等教育へのインパクト

- 大学教育やリカレント教育の大きな変革が始まる。**学びのプロセスや学位のあり方が変わる**。学生の大学間の流動性が高まる。
- 国内外の各大学が多様な教育プログラムを準備してマイクロクレデンシャル（MC）を発行する。（AIデータサイエンス、マネジメント、エネルギー、環境などの特定分野等）
- 日本や海外で働く方が自分の**キャリア目標に沿って多様な形態で学びその証明としてMCを得る**。
- マイクロクレデンシャル（MC）を組み合わせることで修士や学士の学位にも繋がる**
- 国内外でのMCの流通の仕組みを構築し、学生や社会人が多様な学習内容を柔軟な方法で学び、キャリアのための学修歴に加えることを可能にする必要がある。

8

マイクロクレデンシャルの定義

- マイクロクレデンシャル（MC）は**教育プログラム自体と教育プログラムの学修歴の証明という2つの側面**を持つ。その定義は各国や地域により異なる。ここでは2022年にUNESCOが各国の定義を踏まえてまとめたMCの定義を用いる。

マイクロクレデンシャルは：

- 学習者が知っていること、理解していること、またはできることを証明する**、対象が重点化された学修成果の記録である。
- 明確に定義された基準に基づいた**アセスメント**を含み、信頼できる提供者によって授与される。
- 単独で価値を持ち、さらに他のマイクロクレデンシャルまたはマイクロクレデンシャルの一部を構成したり、それらを補完したりすることができる（既修得学習の認定も含める）。
- 関連する**質保証**を求める基準を満たす。

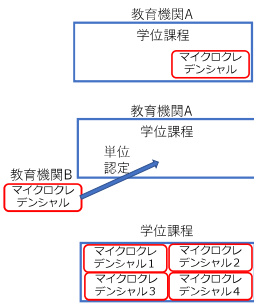
UNESCO, 2022, Towards a common definition of micro-credentials, <https://unesdoc.unesco.org/ark:/48223/pf0000381668>

マイクロクレデンシャルの学習者

- 学位取得を目的としない生涯学習者**
 - アップスキリングやリスキリングを目的として、マイクロクレデンシャル（MC）を取得するが、学位取得を目的としない。
- 学位取得を目的とした生涯学習者**
 - 国内外の大学からMCを取得し、それらを大学院・大学の単位としての認定を受け、最終的に修士や学士の学位を取得する。（MITのマイクロマスター等）
 - 入学する前からMCの取得が可能である。
 - 社会人が大学院に進学する際の準備にもなる。
- 一般の大学生、大学院生**
 - 数理・データサイエンス・AI等の副専攻プログラムの修了証として発行する。
 - 複数のMCの組合せとして設計された学位課程。（サイバー大学等）
 - MCの取得の証明書は、学習意欲の向上に寄与する
 - MCの取得に対して学修成果が明示されるため就職活動の際にも活用できる。
- 単位取得を目的とした留学生**
 - 留学時に取得した科目等に対してMCが発行され、所属大学の単位として認定される。

学位につながるマイクロクレデンシャルの形態

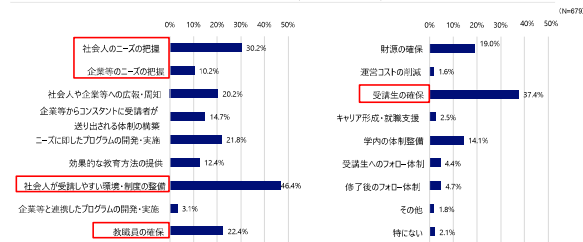
- 内包モデル**：マイクロクレデンシャルが学位課程等の一部として設計されており、マイクロクレデンシャルを得た後に、学位課程等に入学することで学位を取得できる。
- 既修得学習の認定**：マイクロクレデンシャルを得た後に、学位課程に入学し、マイクロクレデンシャルを学位課程等の単位として認定を受ける。
- モジュール**：高等教育機関が学位課程を複数のモジュールに分割し、各モジュールに対しマイクロクレデンシャルが発行される形態



©2022 Masahiro Inoue

大学がリカレントプログラムを実施するにあたっての課題

- 「社会人が受講しやすい環境・制度の整備」が最も多く、次いで「受講生の確保」や「社会人のニーズ把握」「受講生の確保」や「教職員の確保」が多くなっている。



出所：大学等における社会人の学びの実施状況に関するアンケート調査（大学等向け）（2020年12月～2021年2月）
出所：文部科学省生涯学習推進課、職業実践力育成プログラム及びキャリア形成促進プログラム実施機関向けリカレント教育調査報告書、2022年8月19日

スライド13

マイクロクレデンシャルに求められる条件

- ・ **マイクロクレデンシャルの設計の条件**
 - ・ 透明性 (Transparency) . . . 学修成果、学習量、発行者の情報等を公表
 - ・ 学修成果の適切なアセスメント (Valid assessment) . . . 明確な基準、多様な評価
 - ・ 質保証 (Quality Assurance) . . . 内部質保証の基準の公表
 - ・ **マイクロクレデンシャルのフレームワークやガイドラインに沿って設計する** . . . 共通定義や標準記述子に基づくことで、1機関内に限定されず、国内外での流通と共有が可能になる
- ・ **マイクロクレデンシャルの計画・運用での指針**
 - ・ 学習者本位 (Learner-centered) . . . 柔軟な学習方法。例えば、オンライン、ブレンド型等
 - ・ 発行機関と雇用者の協力 (Relevance) . . . ニーズを把握、共同開発や実施
 - ・ 多様な学習経路を支援 (Learning Pathways) . . . 部分的な学習から学位へ
 - ・ 情報提供とガイダンス (Information and guidance) . . . サポート、比較サイト
- ・ **マイクロクレデンシャルをデジタル発行する際の条件**
 - ・ 検証可能性 (Authentic, Verification) . . . 偽造や改ざんを防止
 - ・ 学習者が学修歴を安全に所有し利用できる (Portability) . . . 学習者が持ち運べる

©2024 Masahiro Inoue 13

スライド14

マイクロクレデンシャルの国内外の最新状況

- ・ 国内
 - ・ JVC-Campus/JMOOCによるマイクロクレデンシャル共同WGが2023年8月発足
 - ・ 同WGが日本国内の標準としてのマイクロクレデンシャルのフレームワーク (枠組み) とデジタル発行のガイドライン第1版を2024年4月に発行した。
 - ・ 大学や学協会が同フレームワーク案に沿ったマイクロクレデンシャルを2023年秋から順次発行中。(公益社団法人日本工学教育協会、サイバー大学、JVC-Campus他)
- ・ 国際連携
 - ・ JMOOCとThai MOOC (タイ国高等教育科学研究イノベーション省) がマイクロクレデンシャルの連携を開始 (2023年8月から)
- ・ 海外
 - ・ 欧州、豪州、マレーシア等世界各国がマイクロクレデンシャルのフレームワークの設計と運用を進めている。(OECD2023)
 - ・ 欧州、豪州の各国政府がフレームワークに沿ったマイクロクレデンシャルの制作と発行に関して政府補助事業を実施。(OECD2023)
 - ・ UNESCO、OECDなどがそれぞれ、マイクロクレデンシャルでの国際連携に関して国際会議を実施 (それぞれ年間3-4回実施)
 - ・ 東南アジアでも、シンガポール、タイ、マレーシア等の大学がマイクロクレデンシャルの発行を実施している。

OECD2023, Public policies for effective micro-credential learning, OECD EDUCATION POLICY PERSPECTIVES No.85, 2023.

14

スライド15

米国MITのマイクロマスター MITx MicroMasters® Programs

海外の事例

- ・ プログラム名
 - Supply Chain Management
 - Data, Economics, and Development Policy
 - Principles of Manufacturing
 - Statistics and Data Science
 - Finance
- ・ Advance your career or accelerate your Master's degree with a **graduate-level digital credential** from MIT.
- ・ The MicroMasters program credential from MIT Open Learning is a professional and academic credential for **online learners** from anywhere in the world who seek focused, accelerated advancement.
- ・ Enroll in a program—no admission required—and take a series of graduate-level online courses, taught by MIT instructors, through **edX or MITx Online**.
- ・ Earn a program credential by completing the course and passing one or more proctored exams.
- ・ Enjoy the credential benefits: Credential earners **can also apply for an accelerated master's degree program at MIT and other pathway schools**, and include your credential on professional profiles. MicroMasters program credential earners also become affiliates of the MIT Alumni Association.

修士課程の一部分をマイクロクレデンシャル化
MITの修士課程に入学すれば単位として認定される

https://micromasters.mit.edu/ 15

スライド16

オンライン修士課程の事例 イギリス King's College London

- ・ Master's Degree (180単位)
- ・ Postgraduate Diploma (120単位)
- ・ Postgraduate Certificate (60単位)
- ・ **Module (15単位)**

100% fully online Master's programmes

- ・ Study flexibly, anywhere in the world, without taking a career break.
- ・ 世界各地の社会人 (実務経験者) をターゲットに開講 (MA/MSc/LLM 12コース)。
- ・ 1モジュール (科目) 15単位 × 12モジュール 合計180単位 (修士論文30単位含む) で修了。
- ・ 1モジュール6週間、年間6モジュール開講。入学のタイミングはモジュールの開始に合わせて年6回設定。
- ・ 最短2年、最長6年まで在籍可能 (仕事や育児・介護等の状況に合わせて休学にも柔軟に対応)。
- ・ 図書館やITサポート、キャリア支援等、通学生と同様のサービスを提供。



出典: 織田佐由子, 2022 16

スライド17

マイクロクレデンシャルの積み重ねで構成した 応用コンピューティング学士課程 —シンガポール工科大学の例—

海外の事例

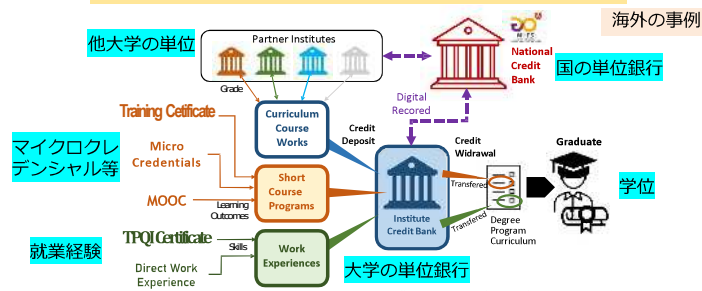


https://www.singaporetech.edu.sg/undergraduate-programmes/applied-computing-csm から作成 ©2023 Masahiro Inoue 17

スライド18

Credit Bank Mechanism in Thailand タイ教育省の単位銀行の例

2019/2022 Regulated Framework MINISTRY OF HIGHER EDUCATION, SCIENCE, RESEARCH AND INNOVATION (MHEI)



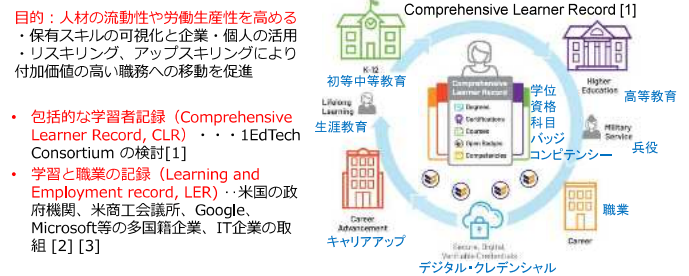
出典: タイ、高等教育科学研究イノベーション省の資料から作成

韓国のマイクロクレデンシャルの取組み

- 1997年から単位銀行、2014年からMOOCを導入
- 小単位専攻課程：高等教育法施行令 第12条2
 - 大学、産業大学、教育大学、専門大学、技術大学と放送大学・通信大学・放送通信大学及びサイバー大学、各種学校及び大学院大学は、・・・学生が少くない単位で様々な専門分野の課程を履修することができる小単位専攻課程を運営することができ
- 共有大学制度（連合大学）
 - 自治体、大学、地域企業などで構成された協議体が、地域の特色に合わせた分野を選定し、それを教えるための教育課程の編成及び教育を共同で行う仮想の連合大学（連合大学）の授与が可能
 - 従来の学部・学科制度では対応が難しい、専門の新設・学位及び資格（マイクロクレデンシャル）の授与が可能
 - 9単位以上、最大15単位で構成
 - DSC共有大学の専攻教育課程：
 - 親環境動力システム専攻、知能型電装制御システム専攻、
 - 先端センサー融合デバイス専攻、ディスプレイシステム半導体素子・部品・装備専攻、
 - 自律走行システム専攻、スマートヒューマンインタフェース専攻、
 - 次世代通信融合専攻、モビリティSW/AI融合専攻

出典：1. 鄭漢標、2024、韓国におけるマイクロクレデンシャルの活用に関する動向と課題、大学教育学会第46回大会
2. DSC共有大学、<https://www.dscu.ac.kr/ko/course/course/group1/2024>

包括的な学習者記録／学習と職業の記録

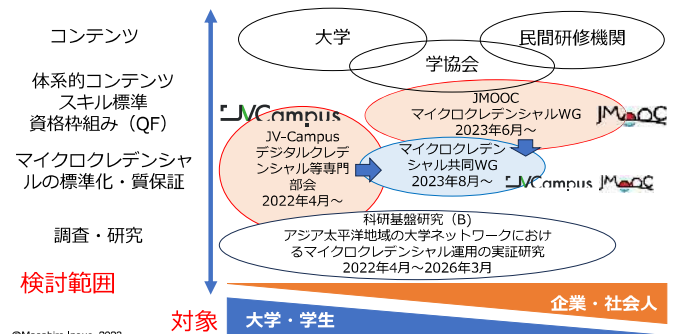


[1] Comprehensive Learner Record, IMS Global, <https://www.imsglobal.org/activity/comprehensive-learner-record>
[2] LER Information & Resources, <https://www.uschamberfoundation.org/3-innovation-network/ler-pilot-program>
[3] ジェトロ・ニューヨーク事務所、保有スキルの見える化手段と活用状況（アメリカ、カナダ、ドイツ）（2020年12月）、<https://www.jetro.go.jp/world/reports/2020/02/7b73cf9a9e1def74.html>

@Masahiro Inoue, 2021 20

国内外で通用する マイクロクレデンシャルの実現 マイクロクレデンシャルのフレーム ワーク（枠組み）

マイクロクレデンシャルの国内での活動（抜粋）



マイクロクレデンシャルのフレームワーク （枠組み）の目的

- 何を学ぶか決めようとしている**学習者**と、マイクロクレデンシャルを発行、認定しようとしている**組織や機関**と、学習者や従業員の学修成果や能力を理解しようとしている**雇用主や職業団体**に対して、マイクロクレデンシャルの共通の指針を設定することで、質の高いマイクロクレデンシャルの制作、取得、活用を促進する。
- マイクロクレデンシャルを相互に**比較し、選択、評価**するために、マイクロクレデンシャルの内容と取得の条件を明確に示す**共通の記述子**を提供する。
- 学習者**が十分な情報に基づいてマイクロクレデンシャルを選択できるようにする。

©2023 Masahiro Inoue

マイクロクレデンシャルフレームワークの取組み

- フレームワークに含まれる内容
 - マイクロクレデンシャルの定義
 - マイクロクレデンシャルの条件（質保証）
 - マイクロクレデンシャルを共通の言葉で表現する（記述子）
- 各国のフレームワーク（枠組み）
 - Australia, National Microcredentials Framework, March 22, 2022
 - EU, A EUROPEAN APPROACH TO MICRO-CREDENTIALS, December 2021
 - 日本の履修証明プログラム, January 23, 2008 (高等教育機関対象)
 - Japan, Micro-credential Framework 1.0, April 2024

JVCampus / JMOOC Micro-credential Joint WG

©2023 Masahiro Inoue

マイクロクレデンシャルのフレームワークの共通記述子
Common Descriptors of Micro-credentials (proposed)

項目名	項目名 (英語例示)	※	EU	Australia	Malaysia	履修証明
学習者を識別する情報	Identification of the learner	必須	必須		有り	有り
発行日	Date of issuing	必須	必須		有り	有り
マイクロクレデンシャル名称	Title of the micro-credential	必須	必須	必須	有り	有り
発行機関	Awarding body	必須	必須	必須	有り	有り
発行国/地域	Country/Region of the issuer	選択	必須			
内容	Content/ Description	必須	必須	必須		有り
学修成果	Learning outcomes	必須	必須	必須	有り	
授業の方法	Form of participation	必須	必須	必須	有り	有り
授業言語	Language	選択	必須	必須	有り	
学習量 (総学習時間)	Learner Effort	必須	必須	必須	有り	有り
評価の方法	Type of assessment	必須	必須	必須	有り	有り
質保証	Type of quality assurance	必須	必須	必須	有り	有り
レベル	Level	選択	必須		有り	
証明	Certification	選択	必須	必須		有り
単位/その他の認定	Credit/ Other Recognition	必須	必須	必須	有り	有り
(受講) 前提条件	Prerequisites needed to enroll	選択	選択	必須	有り	有り
積み上げ可能性	Stackability	選択	選択	選択		

凡例：必須＝必須記述子、選択＝選択記述子、有り＝必須・選択区別なし、空欄＝その他 ©2023, 2024 Masahiro Inoue

マイクロクレデンシャルは教育、デジタルバッジは情報

マイクロクレデンシャル



新しい教育のフレームワーク

・特定の領域の学びと学修成果の証明
(リカレント教育、リスキリング等)

フレームワーク (枠組み)

・教育や資格の制度を国、地域
(EU)、公益団体等が決める
・マイクロクレデンシャルの授与条件

信頼への寄与方法

・**教育の質の保証による信頼**
(学修成果を評価し、保証する)
・信頼できる授与機関であることを示す

信頼の両輪



事例：学協会がマイクロクレ
デンシャルで質を保証し、デジ
タルバッジで偽造されていない
ことを検証。

教育の質
を保証

デジタルバッジ

情報技術仕様 (標準)

・汎用的なデジタル証明の技術
(参加証、学修証明、資格証など
のデジタル発行の他に、免許証など
にも広く使われる情報技術)

技術仕様 (標準)

・国際的な情報技術団体等が決める
・情報の記載と検証の方法

信頼への寄与方法

・**情報のセキュリティによる信頼**
(例：情報が改ざんされていないこと、
偽造でないことを証明する。)

デジタル
技術で検証

課題と対応策：高等教育機関の取り組み

・課題：

- ・2024年度の入学者、59.2%の私立大学が定員割れ (354/598大学)
- ・デジタル化の遅れ。リソース不足だが自前主義
- ・社会人学生が集まらない。リカレント教育への対応が十分ではない。

・対応策：

- ・18歳学生のみを対象にしたこれまでの大学組織と運営を変えていく。入試や
広報のあり方や、社会人教育のニーズの把握を改善
- ・オンライン教育を活用して各教育機関の得意分野を共有する
- ・高等教育機関がマイクロクレデンシャル (MC) 等を媒介に学生、学習者との生
涯にわたる継続的な関係を維持する
- ・リカレント教育、MCを開発し実施する教員を大学として正当に評価するしく
みを設ける
- ・高等教育機関と企業、民間研修機関、専門家団体等との協働による教育プロ
グラムの設計と運用の推進
- ・学修歴のデジタル化 (卒業証明書、成績証明書、履修証明書)
- ・大学の内部質保証に、リカレント教育、MCを公式に組み込み、自己点検評価の
対象として公表する

参考文献

1. 井上雅裕, 角田和巳, 長原礼宗, 八重樫理人, 石崎浩之, 辻野克彦, 丸山智子他, 大学のデジタル変
革—DXによる教育の未来—. 東京電機大学出版局, 東京, 2022.
2. 井上雅裕, マイクロクレデンシャルの標準化と国際連携—生涯にわたる多様な学びの実現—, 工学教
育 (J.of JSEE), Vol.73, No.1, p. 1_8-1_15, 2025.
3. 井上雅裕, 「マイクロクレデンシャル」がもたらす第三段階教育の革新, 高等教育研究, 第27号,
pp.105-124, 日本高等教育学会編, 2024.
4. 井上雅裕, 角田和巳, 長原礼宗, 八重樫理人, 石崎浩之, 辻野克彦, 丸山智子, 芦沢真五, 工学教育の
デジタル変革とマイクロクレデンシャルの取組み, 工学教育 (J.of JSEE), Vol.71, No.4, p. 4_7-
4_12, 2023.
5. マイクロクレデンシャル共同WG, <https://www.micro-credential-jwg.org>.
6. 加藤静香, 高等教育マイクロクレデンシャル. 明石書店, 東京, 2022.
7. 大学改革支援・学位授与機構, 日本の教育資格枠組み (試案), 2023.
8. UNESCO, Towards a common definition of micro-credentials, 2022.
9. Australia, Department of Education, Skills and Employment, National Microcredentials
Framework, Australian Government, 2021.
10. European Union, A European approach to micro-credentials,
https://ec.europa.eu/education/education-in-the-eu/european-education-area/a-european-approach-to-micro-credentials_en
11. 1EdTech, Comprehensive Learner Record (CLR).

スライド1

2024年度 第30回 FD・SDフォーラム
シンポジウム1「FD×SDで向き合う新しい学び」

2025.3.1@龍谷大学深草キャンパス

キャンパスから自由になる大学の学び ーミネルバ大学の事例を中心にー

松下 佳代

京都大学大学院教育学研究科
matsushita.kayo.7r@kyoto-u.ac.jp

スライド2

本日のトピック

- **キャンパスから自由になる学び**
≠通信制大学（オンライン大学）
 - 学びの場として、キャンパス・教室という空間には囚われない
 - だが、「場所に根ざした教育（place-based education）」はむしろ重視
- **主な事例としてのミネルバ大学**
 - 授業はフルオンライン ≠オンライン大学
 - キャンパスはもたず、世界7(4)都市を移動しながら学ぶ
＝「**都市をキャンパスに**」
 - どんな学びが展開されているのか？
 - そこでの教員と職員の役割は？

2

スライド3

ミネルバ大学ってどんな大学？



□ コスリン, S. M. & ネルソン, B. (編) (2024)『ミネルバ大学の設計書』(松下佳代監訳) 東信堂。
□ 松下佳代(編) (2024)『ミネルバ大学を解明する』東信堂。

スライド4

ミネルバ大学(Minerva University)

- ミネルバ大学 (2012年設立、2014年開校)
 - 「世界で最もイノベティブな大学」(2022～2024)
 - アメリカの小規模リベラルアーツ大学 (1学年150名程度)
 - **世界の7都市を移動しながら学習**
 - SF→ソウル・ハイデラバード→ベルリン・ブエノスアイレス→ロンドン・台北
 - * 近く、4都市に変更 (SF・東京+2都市がコア都市に)
 - **都市をキャンパス**にした活動 (Project-BL, Community-BL, インターンシップなど)
 - **フルオンライン**での少人数アクティブラーニング (1クラス19人以下)
 - 学びの成果と軌跡を可視化する**評価**
 - 世界中に散在する**教員**、現地に居住する**職員**
 - ユニークな**アウトリーチ活動**による学生獲得

著作権の都合上、当日のみの投影

4

スライド5

ミネルバ大学設立の意図

● アメリカの高等教育の抱える問題

- ① 大学が、卒業後の社会や生活に対して**準備できた状態**にまで学生を育てられていないこと
- ② 大学教育があまりに**高額**になり、ほとんどの学生が**負債**を抱えて卒業していること
- ③ 半数以上の学生が卒業できておらず、卒業できたとしても十分、**授業に関与**できていないこと
- ④ **入学者選抜**において、国籍、人種、社会経済的地位、レガシー（卒業生の近親者）など、本人の能力以外の要因で**定員枠**が設けられていること

ミネルバ大学は、
これらの問題を解決し、世界のリーダーを
育成するために、
自分たちの設定した原理・原則にしたがって、
意図的に、ゼロから立ち上げた大学

著作権の都合上、
当日のみの投影

□ Kosslyn, S. M., & Nelson, B. (Eds.). (2017). *Building the intentional university: Minerva and the future of higher education*. The MIT Press.

5

スライド6

大学のミッションと目標

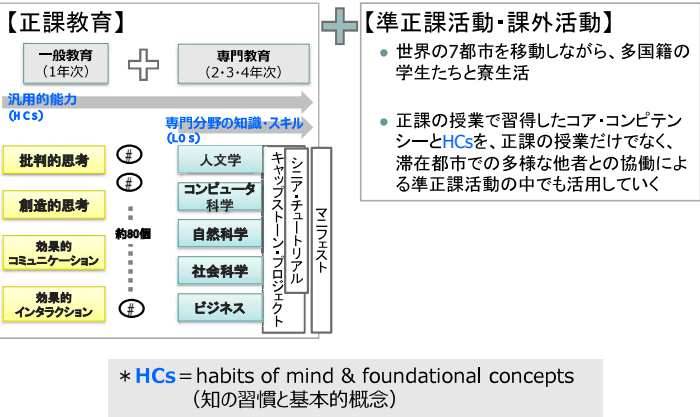
- **ミッション**
 - 「**世界のために批判的な知恵** (critical wisdom) を涵養する」
- **最上位の目標**
 - **実践知** (practical knowledge) の育成
- **目標とカリキュラム・学習活動**
 - 正課教育（オンライン授業）
 - 準正課・課外活動（経験学習）

ハイブリッド学習

6

正課教育と準正課・課外活動

全体



HCsという「汎用的能力」

- HCsはミネルバの中核
 - 4つのコア・コンピテンシーを具体化したものとして、約80個のHCsを抽出
 - * たえず更新(当初は114個)
- HCsの例
 - #correlation (相関関係と因果関係を区別する)
 - #gapanalysis (創造的な解決がどこで必要とされるのかを明らかにするギャップを特定する)
 - #algorithms (現実世界の問題を解決するためにアルゴリズム的な方略を適用する)
 - #audience (文脈や相手にあわせて口頭や文書での表現の仕方を変える)
 - #nudge (他者の決定を「ナッジ」する)
- どのように学ぶのか？
 - 1年次には、ビッグクエスチョンを通じて学ぶ
 - (例)「どうすれば世界の人々に食料を供給できるか？」
 - 3年間活用しながら(＝転移させながら)、学び続ける
 - 汎用的ではあるが、脱文脈的ではない

学生の声: HCs(汎用的能力)

- ミネルバでの共通言語になっている
 - 他のミネルヴァの学生と一緒に何をしても、何を必要があるかを説明するのではなく、HCsの名前を伝えるだけで、どのようなステップを踏む必要があるのか、何に焦点を合わせるべきなのかを誰もが知ることができます。
- 使いやすさに違いがある
 - いくつかのHCsは、ある特定のことを、どのように行うかを説明しているだけのものなので、そのようなHCsは授業で本当に適用しやすいです。データ収集の方法やデータ分析の一般的な方法を説明したHCsがありますが、これは非常に適用しやすく、実行するためのステップを教えてくれるものです。ですが、HCsの中にはとても一般的で、とても意図的に実際に適用しようと思わない限り、専攻コア科目に適用するのが難しいものもあります。
- 汎用的とはいえ、専攻(専門分野)との相性もある
 - 私の場合、例えばAH[＝人文学]のHCはすごく使いやすくて、例えば初対面の人と話すときになって、このオーディエンス(#audience)は誰だろうとか、私は何を伝えたいのだろうとか、実際に本当に使えるHCもたくさんあるのですけれども、CS[＝コンピュータ科学]の専攻でないので、#algorithmsなどはすごく使いにくくて…

- 正課授業
 - オンライン少人数AL
 - オンライン + 教師によるコントロール
- 準正課活動
 - 「都市をキャンパスに」
 - 世界7都市を移動しながら、現地でPBLやCBL
 - 身体性、直接経験 + 高い自由度

著作権の都合上、当日のみの投影

著作権の都合上、当日のみの投影

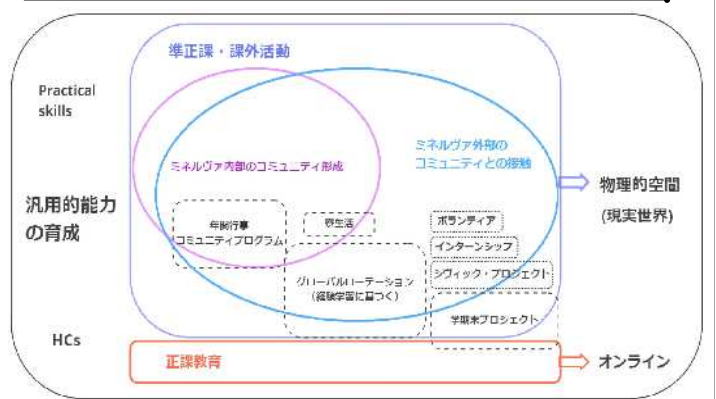
□ <https://www.youtube.com/watch?v=Gk5lXqh7Tg>
□ 山本秀樹「ミネルバ大学と高等教育の未来」京都大学 高等教育研究開発推進センター国際シンポジウム、2017年5月30日

Personal		Interpersonal	
Thinking Critically (批判的思考)	Evaluating Claims (主張の評価)	Using Language (言語の使用)	#professionalism #thesis #organization #composition #communication #audience
	Evaluating Justification (正当化の評価)	Using Nonverbal Communication (非言語コミュニケーションの使用)	#medium #expression #communicationdesign #multimedia
	Analyzing Data (データの分析)	Interaction Within Complex Systems (複雑系の中でのインタラクション)	#multipleagents #levelsofanalysis #emergentproperties #multiplecauses #networks #systemdynamics
	Analyzing Decisions (決定の分析)	Negotiating and Persuading (交渉と説得)	#negotiate #rude #carrotandstick #cognitivepersuasion #emotionalpersuasion #confidence
Thinking Creatively (創造的思考)	Analyzing Problems (問題の分析)	Working with Others (他者との協働)	#povertdynamics #strategies #differences #conformity #selfawareness #emotionalq #responsibility
	Facilitating Discovery (発見の促進)	Resolving Ethical Problems (倫理的問題の解決)	#ethicalframing #ethicalconflicts
	Applying Research Methods (研究方法の適用)		
	Solving Problems (問題の解決)		

HCsのリスト

□ 松下佳代編(2024)『ミネルバ大学を解剖する』東信堂, pp.21-22. 10

ミネルバの準正課・課外活動



「都市をキャンパスに」

● グローバル・ローテーション

- 2024年度まで：7都市 → 2025年度から：4都市（東京も）

学年	秋学期(9月～1月)	春学期(2月～6月)
1年	米国：サンフランシスコ	
2年	韓国：ソウル	インド：ハイデラバード
3年	ドイツ：ベルリン	アルゼンチン：ブエノスアイレス
4年	英国：ロンドン	台湾：台北

* ただし、グローバル・ローテーションはミネルバの専売特許ではない

- **LIUグローバル** (Long Island University Global College)
 - 滞在都市：8カ国（以上）／現地でインターンシップ、サービスマーケティングなど
- **Think Global School**
 - 3年間で12カ国に留学し、世界を旅する高校

など

13

各都市での経験学習

私たちの学生は、観光客ではなく、**地域コミュニティの積極的な参加者**です。**市民的な課題**や**場所に根ざしたプロジェクト**に知識を応用することで、有意義に都市に関わり、貢献するのです。

● 経験学習の深化

- **1. 接触** (exposure)：都市体験への参加 例)エンバナーダづくり
- **2. 関与** (engagement)：集中的な経験学習プログラム 例) Genslerで共感研究の方法の学習、デザイナーや建築家との面会・議論
- **3. 没入** (immersion)：現地の組織に持続的に関わって、重要な問題に対する理解を深める 例) SF Civic Innovation Officeによる市民プロジェクトへの参加
- **4. インパクト**：都市パートナーのニーズに応じて成果をあげる 例) サンフランシスコ都市計画局から依頼された調査プロジェクトの実施

□ ミネルバの経験学習 (<https://www.minerva.edu/undergraduate/students-life/#experimental>)

14

学生の声：準正課活動・課外活動

● オフラインでの人とのつながり

ミネルバはすぐオフラインのつながりも大事にしていると思います。授業はオンラインで、もうほんとに効率良く知識を与える分、**授業外では、もうとことんオフラインでいろんな人と、その場で対人関係を築いてほしい**というメッセージはよく学校から来ます。

● 自分について知る・考える

ミネルバの生活って、やっぱり都市も変わるし周りにいる人もすぐ短いスパンで変わるので、自分がどういふふうにあくたしたらいいかっていうのを、各都市ですごく考える必要がありました。**日常で自分自身を考える機会がすごく増える**っていうのと、**セルフアウェアネス**の高い人が周りに多いから私自身も自分自身についてより深く知りたいたいと思うことが多いですね。

● 多様な価値観が交わる寮生活

寮がなかったら、自分の友達もずっと自分と似た価値観や文化、背景の人とくっ付きやすくなってしまって、どうしても価値観が固定されてしまうことがあると思います。もちろんそちらの方が心地よいのですが、私はそれに制約されたくなくて、だからこそ**寮生活のようにみんなが混ざって生活している空間がすごく大事**だと思います。

15

教職員に求められるもの：教員

● ミネルバ大学の教員とは？

- 5つの学部にあくた50名の教員が在籍
- **専門分野における博士号をもつ学際的な教員**
- 1年次の**コーナーストーン科目(全員)**、2年次以降の専門科目、キャップストーン・プロジェクトの指導などを担当

● 世界中から教員を募集

- 適切なタイムゾーンで授業を行えば、**世界のどこに住んでいてもよい**

● テニユアの教員や非常勤講師は存在しない

- 教育専念、3年任期(最長6年) ←雇用流動性の低い社会には合わない

● 全員が同じトレーニングを受ける

- 採用時に**3週間の「非常に厳しいトレーニング」**を受講 =FD
- 授業法、評価法などの学習 → Forum™での実習 → 実践授業／評価実践

16

教職員に求められるもの：職員

● ミネルバ大学の職員(例：学生生活スタッフ)とは？

- 滞在都市に、複数名の学生生活スタッフ＋都市ディレクターが存在

● 職員の役割と学びへの関与

- ①学生の健康や生活上の安全確保(課外)
- ②都市での経験学習のサポート(準正課)
例)エンバナーダづくり、ゴミ問題プロジェクト
- ③「居住地に根ざした課題」のサポート(正課)

● 求められる資質

- 多様なバックグラウンドと高いソーシャルスキルをもつこと
- 滞在都市での文化・歴史に通じていて、豊富なネットワークをもっていること

17

教職員の役割と協働

● ミネルバ大学での学び

- その特徴のひとつは、**都市をキャンパスにすること**
 - 授業をオンラインで行いつつ、都市のリソースを活用した学びを展開したい

その実現のために必要な組み合わせとは？

● 教員の特質

- 授業はすべてオンラインのため、様々な地域から優秀な教員を採用できる
 - 居住地に根ざした課題を考案するが、**学生が滞在する都市にはいない**

● 学生生活スタッフの特質

- 学生生活のサポートを主としながら、学生の学びにも関与する
 - **学生が滞在する都市に居住**しており、その都市のことをよく知っている



□ 大野真理子 (2024.12.1)「教職員」『ミネルバ大学を解する』出版記念シンポジウム配付資料。

18



キャンパスから自由になる学び —日本での可能性—

日本の大学へのインパクトは？

- **アメリカの高等教育の抱える問題(再)**
 - ①大学が、卒業後の社会や生活に対して準備できた状態にまで学生を育てられていないこと
 - ②大学教育があまりに高額になり、ほとんどの学生が負債を抱えて卒業していること
 - ③半数以上の学生が卒業できておらず、卒業できたとしても十分、授業に関与できていないこと
 - ④入学選抜において、国籍、人種、社会経済的地位、レガシー(卒業生の近親者)など、本人の能力以外の要因で定員枠が設けられていること
- **日本の大学教育の問題**
 - ④以外は、多かれ少なかれ日本の大学にもあてはまる(とくに①)
 - では、ミネルバ大学の試みは、日本の大学にどのようなインパクトを与えるか？

すでにみられる影響

- **高等教育政策**
 - 大学設置基準の改正(2022.9)
 - 「教育課程等に関する特例制度」
 - (例)「遠隔授業の60単位上限」「校地・校舎面積基準」などの適用除外
- **大学**
 - 通信制大学**
 - ZEN大学**: オンライン授業+地域・企業と連携した課外プログラムなど
 - さとのば大学**: 別大学の通信教育課程+地域を巡りながらPBL
 - 通学制大学**
 - 清泉女子大学地球市民学科**: 「101のコンセプト」+海外フィールドワーク

著作権の都合上、
当日のみの投影

ミネルバから何を学ぶか

- **ミネルバ大学**
 - アメリカの高等教育の抱える問題に対し、常識を問い直して、大学を構成するそれぞれの要素を見直し、テクノロジーの力を最大限に活用して「**新結合**」(=イノベーション)を創り上げた

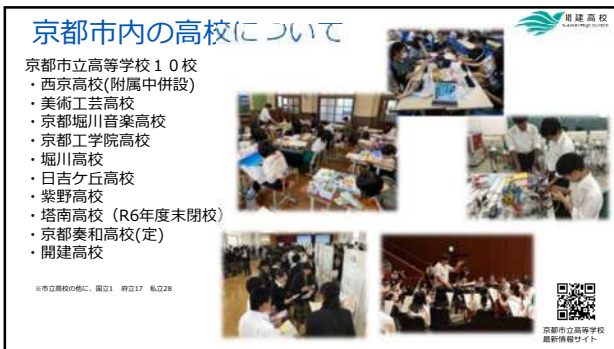
[ミネルバ大学って]全然万人向けの大学ではないなと思います。... 本場に合う人にめっちゃめっちゃいい教育を、少しずつ少数で、そのモデルを広げていこうっていう大学なので。... (学生A、卒業後のインタビュー)

- **日本の大学**
 - ミネルバの表面的な模倣にとどまらず、大学入学者の減少の時代にあって、**自分たちの新結合**を生み出すことにつなげる
 - キャンパスをもつ通学制大学にとって「キャンパスから自由になる学び」とは？
 - …逆に、「**キャンパスがあるからこそできる学び**」とは何か？
 - 教育以外の機能をもつ大学の必要性
 - …ミネルバは一般的な研究大学の存在を前提にして成り立つ大学

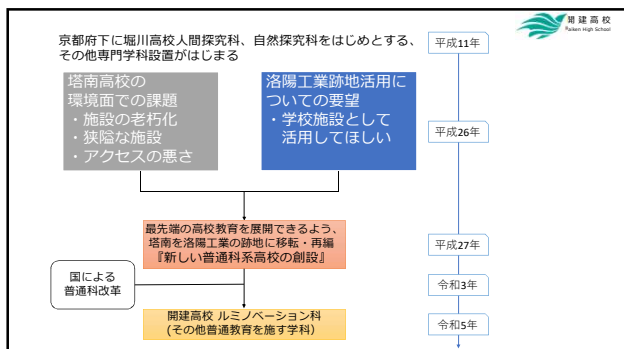
スライド1



スライド2



スライド3



スライド4

京都市立開建高等学校

設置学科：ルミノバージョン科(その他普通教育を施す学科)
募集定員：240名
教育目標：より良い未来をめざし、個性を活かして社会を協創する生徒の育成

「希望をもって**未来を協創**することを通して、
生徒一人一人が**新しい自分**を見つけ、
自らの成長を実感できる学校」

育成する6つの資質・能力
学び続ける力：変化する社会においても、自由な発想で学びを楽しみ、自己を成長させ続ける力
対話力：他者の意見を受けとめ、自己の考えについて根拠をもって発信し、対話を通して新たな発想に導く力
協働力：他者を巻き込み様々な違いを乗り越えて、あらゆる場面で協働する力
思いやる心：文化的背景や考えを理解し、自己を大切にすること
貢献志：よりよい未来を目指し、その創造に主体的に向き合うとする志
挑戦力：失敗でさえも原動力として、自己の成長や様々な課題に向き合う力

スライド5

開建高校のモットー

- ・楽しみながら夢中になって学んでほしい。
- ・様々な活動に果敢に挑戦してほしい。
- ・学ぶことの楽しさや喜び、考えることのすばらしさを体験してほしい。

↓

「 やってみたい を やってみる
～夢中になる学びがここにある～」

スライド6

ルミノバージョン科 (その他普通教育を施す学科)
地域社会を学ぶのではなく、“**地域社会で学ぶ学科**”です。
地域で見えた課題に対して、1つではない答えを
自分たちのプロジェクトとして探究します。
各分野のプロの方との対話・協働による
体験的・実践的な学びを行います。
学校内の他者だけでなく、地域の方々と対話し、
多様な価値観を共有します。

※文部科学省「新時代に対応した高等学校改革推進事業」の研究指定を受けています (R4～R6年度)
※文部科学省「高等学校DX加速化推進事業 (DXハイスクール)」の指定を受けています (R6年度)

スライド7

生徒指導の考え方

生徒心得

- 様々なものをよく見て、自由に考えてみることに。
- 多くのことに興味を示し、自分たちでやってみたいことに挑戦する心を育てること。
- 周囲の人の考えを受け止め、対話を通じて相手の心を慮って行動すること。
- 常に自分や社会をより良くしようとする志を持つこと。

学校生活のルールとして、施設の使い方等は示しますが、禁止事項を定めたもの（いわゆる校則）のようなものは学校が一方的には定めていません。



スライド8

自ら考え、自ら学ぶ力を育成する学校なので、入学試験の得点だけを意識した視野の狭い受験勉強に注力するのではなく、生徒自身が興味・関心を活かして学び、**創造力や問題解決に必要な柔軟な思考力、豊かな人間性等を主体的に学ぶ取組**に注力しています。



スライド9

カリキュラム開発の3つの柱

- ①授業が変わる ～学びを楽しむ～
- ②魅力あふれる京都をフィールドに実践する探究活動 ～学びと社会をつなぐ～
- ③生徒が夢中になれる課外活動
～より深く、より広く～



スライド10

新たな学びの環境L-podの活用

知らないことや課題に対して、自分なりの問いを立て、自分なりの方法で答えを探っていく学びを行うための教室です。「先生が教える」から「生徒が学ぶ」に転換していきます。



16m x 16m(普通教室4個分)の教室では、80名の生徒と複数教員が共に学びます。



多様な形態がとれる新しい学習空間で、「生徒の数と同じ数の学びと進路がある」という考えのもと、生徒自身が設定した目標に向かって、自分に適した方法で学ぶスタイルを生徒と教員で創ります。



スライド11



スライド12



開建高校の授業

1 クラスの人数は 80 人

担任の先生は 3 人

教科の担当も 3 人
(一部の教科を除く)

開建高校
学びの3原則

問いから始まる学び

対話・協働での学び

個に応じた学び

自ら考え、自ら学ぶ

[illegible][illegible]



協創
Perspective

1 年生前期



東洋高校
Tōyō High School

各教科・科目の独立した世界のルールや内容を理解するだけではもったいない!! **教科・科目の学びから、この世界の見方・考え方を学ぶはず!!**

「特定のバースペクティブだけでは捉えきれない広範かつ複雑な文脈や事象を多様な角度から俯瞰して捉える」ことを各教科・科目の学びで発揮することで、各教科・科目のバースペクティブがより強固なものとし、深い学びにつながる



各教科、科目のバースペクティブで『コンビニ』を見てみる

課題提示



社会課題の解決に各教科・科目のバースペクティブを使ってみる

京大 (後期)

企業、大学が活動するにあたって持っている、現状の認識や問題意識

「考える素材」

京都で活躍の企業・大学

フィールドとしての「京都」

フィードバック
生徒の探究活動の成果について、講評をいただく

参加

「素材」の中から課題を見つけ、課題解決のための探究活動を展開
「アプローチ方法は生徒が考える」
調査研究、思考実験など

探究高校1年生

「素材」例
「日本人の仕事観、働き方を考えたい」
「日本人の司書精神を学びたい」
「高校1年生がより多くの国で働くようにしたい」

スライド19



スライド20

事業者名称	「考える素材」
株式会社クーパルC3	障がい者の可能性を引き出し、障がい者がより多くの場で働けるようにしたい
コミュニティバンク京信上烏羽支店	地域に合ったコミュニティを作りたい
亀屋良長株式会社	伝統文化を守るだけでなく、伝統を道具として使い、皆様に喜んでいただけて幸せになって頂けるものを届けたい
株式会社ウエダ本社	日本人の仕事観、働き方を変えたい
京セラ株式会社	「誰かのため」になることをしたい
パナソニック株式会社デザイン本部	孤独や孤立をなくし、地域で協力して「豊かなくらし」を実現したい
南区役所	みなみ力(地域力)を活性化したい
京都市役所 京都市都市計画局 歩くまち京都推進室	持続可能な公共交通ネットワークの構築をしたい 人と公共交通優先の「歩いて楽しいまち」を実現したい

スライド21

生徒の探究の発表より

スタートの課題 日本人の働き方・仕事観を変えるには？

！ 働きやすい環境を作ることが必要では！

福利厚生の実践が解決に向けた一つの案では？ ? 新たな問い

！ 福利厚生について調べてみたところ、『配偶者』という言葉がたくさんあった！

配偶者になれないLGBTQの方はどうなるんだろう？ ? さらに新たな問い

！ パートナーシップ制度というものがあるらしい！

パートナーシップ制度にも何かと問題があるらしい。どんな問題があるのか？ ? この生徒だから出てきた問い

スライド22

この生徒の発表より思うこと

○探究は縦に深まったり、横に広がったりするようだ
その生徒独自の進化／深化が起こる

○探究にゴールはないようだ
生涯、考え続ける楽しい思考プロセスでいいのでは？

○生徒が考えたいと思える問いと出会うことが重要そうだと
出会える仕掛けが必要だ

スライド23

開建高校での大人の関わり方

○大人が「正解」を求めないこと

○時間に間に合わそうとしないこと

○適切なフィードバックをすること

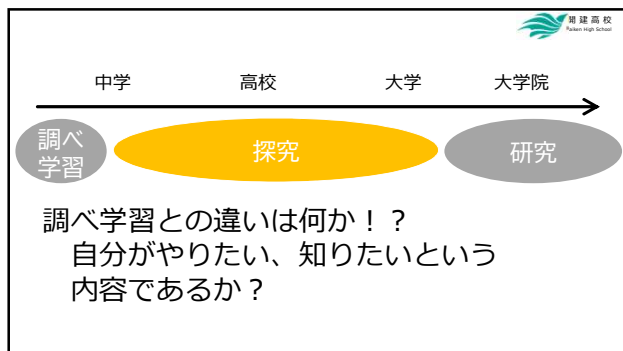
スライド24

中学 高校 大学 大学院

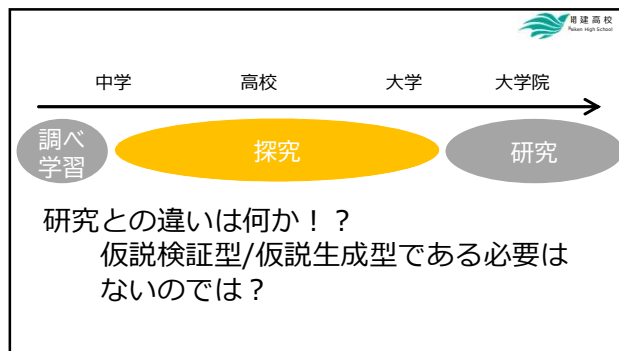
調べ学習 探究 研究

探究でいける学齢期の幅はどうやら広そうだと
大学になっても探究活動が必要なのでは？

スライド25



スライド26



スライド27

地域・社会をフィールドとした探究学習を通して、社会への関わり方を変える

生徒の振り返りより

- ・はじめは課題について調べたことがなくてあんまり理解しなかったけど、探究を通していくうちにともとも知らなかった課題も見えてきてさらに調べる幅が広がって大変な部分もあったけど知りたいことが増えることが楽しかった。
- ・考える素材から自分たちで探究を深めていく中でそこからまた新たな問いや考え方が出てくるにつれてどんどん知識が深まっていくのがとても楽しく感じました。
- ・実際の働き方を間近で見ることでとても良い体験だったと思う。働くということがもっと身近なものになった。実際自分が働くようになった時にどのような条件で仕事を探すべきか参考になった。
- ・普段は行かないところだったり、見る機会がないところなどを一から調べまわったり、プロの人に聞きに行ったりなど普通ではないことをたくさん経験することができました。
- ・地域のことを考えながら何かをするという初めての経験になりました。
- ・中学と違うところは、時に取らず、自分たちの自由に考えることが出来ること。あるテーマが与えられて、そこからは自由に発想を膨らますことが出来るのは開拓らしさが出ていたなと思った。
- ・おかしいなと思う日本の社会問題はいろいろあってもそれを改善するためにこうしたらいいやんと提案してみたらそれを実行するところになったしもうなご一筋縄ではいかないことが多くあると感じました。
- ・ほかの人の意見を聞いて、「あ、そういう考えもあるのか、こんな意見思いつかなかったな、これとこれを組み合わせたらより良い取り組みができそうだな。」などたくさん考えることがあったし、たくさん人の意見を取り入れることによってより良い、大きくて素敵な折衝につながるということを自分の身で体験することができた。
- ・自分だけの視点だと一方的にしか見れていなかったアイデアがとても薄いがみんなで協力したり教科書と目の前で見た年齢の目で見たり言葉で見たりすることで色々なアイデアや意見、想像が膨らむため自分とは少し角度の違う意見に触れることが出来る。その過程があった上でいいアイデア、意見があることがよくわかった。

スライド28

開建コアスキルカード



自分の理解した方法を何段階してもうまくいかないとき

当たり前に思っていることを疑えなさいとき

自分の気持ちや思いをいったん置いて、客観的に考えたいとき

スライド29

開建コアスキルカードの特徴

- 大分類として、「探索」「分析」「解釈」「表現」を設定
→質の高い探究を行う上で、「探索」のスキルは特に重要
- カードとして、文字通り「手札」を与えることで、様々な場面でコアスキルの活用が容易に
- コアスキルの修得には、ワークショップ型の授業を実施



スライド30

16のコアスキル

各教科の授業や諸活動においてコアスキルを参照した声かけや指導を行うことで、探究の時間のみに使うものではなく、また、日常で必要なスキルだということを実感させる

学校説明会での生徒企画
コアスキルカードを使って
「未来の電車を創造しよう」



スライド31

2年生

スタート

「それしかないわけじゃないでしょう」
「それ」を発見し、「〇〇だってあるじゃない！」の
提案を行う



- ・プロジェクトを発案・実行する形式や、問題の調査解決、学問的研究など、幅広い活動が行われている。
- ・個人で進めることも、チームで進めることも可能。
- ・学校外の企業・団体と連携した活動を希望することも想定され、授業時間中に学校外に行くことも許可している。

スライド32

2年生 探究活動（一例）

- 絵と文字がない本
- 消しカス問題を解決したい！
- 「古代エジプト」知っていますか？
- 誰でも簡単に野菜を育てられる方法を教えます
- 譲渡会in開建
- アニメーション効果が与える様々な映像の印象
- 開建高校×恐竜図鑑をつくりたい！！
- 服をリメイク

教師が一から十まで教えることは不可能
→専門的知識を持ってない教員が伴走する



スライド33

生徒の主体的な活動を支援しています！

まつり実行委員会

文化祭・体育祭をゼロから創り上げる実行委員会
企画・運営を通して、協創する力を育成

New HORIZON Day

普段とは違う活動にチャレンジ
～自分の興味・関心を広げ、仲間と楽しもう～



スライド34

開建高校の探究

3本立て

- ①授業（総合的な探究の時間を中心に）
- ②特別活動（学校行事等）
- ③課外プロジェクト

生徒プロジェクト

生徒がやってみたいことを実際にやってみる自主的なプロジェクト活動（予算措置あり）



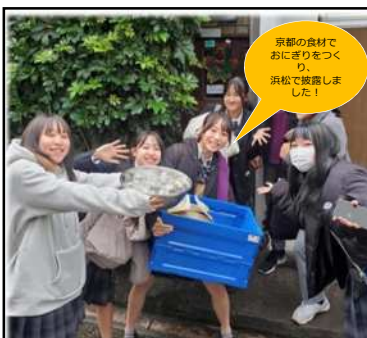
スライド35

開建高校でのプロジェクト（一例）

- ・地域の魅力を発信！おにぎりプロジェクト
- ・地域の魅力を再発見！ポスター作成プロジェクト
- ・開建高校の魅力を発信！学校紹介動画作成プロジェクト
- ・地域の子どもに憩いの場を！いこっと
- ・音楽で盛り上げよう！音楽プロジェクト
- ・宇宙と交信！？宇宙探索プロジェクト
- ・農ある暮らしらすちじんプロジェクト
- ・みんなで学ぼう 防災ボランティアリーダー



スライド36



京都の食材で
おにぎりをつくり、
浜松で披露しました！



スライド37



おにぎりプロジェクト レギュレーション

- ・1チームの人数は3～5名とする。
- ・おにぎりの原価は100～120円とする。
※その内、米の原価は50円として計算する。
- ・おにぎりの具材は京都の魅力を伝えられるものを使用すること。
- ・おにぎりの重量は120g～125gとする。

スライド38



スライド39



親子丼
おにぎり

材料

※おにぎり1個の重量を120～125gとする

材料名	分量 (g)	値段 (円)
米	70	50
卵	26	14
鶏肉	9	10
★九条ねぎ	5	12
★白だし	6	7
みりん・料理酒	3	0.1
のり	原のり1/4枚	15
塩・黒コショウ・七味	適量	(4)
合計	52g	112円

スライド40



学校紹介動画作成プロジェクト

学校の特色・魅力を発信するノーカットの動画を作成

スライド41

「防災ボランティアリーダー」

龍谷大学の先生・研究室の学生さんと共に、能登でフィールドワークを実施



スライド42

探究もプロジェクトも
初めからうまくいくわけがない
なぜ? ↓
教科の学びが足りていないから

↓ 適切なフィードバック

各教科・科目の
パースペクティブを
獲得する学びを加速

スライド43

キャリア教育



連携協定大学の龍谷大学では、興味・関心を
広げる探究学習を1年生の夏休み・冬休みに
計4日間実施しています。



スライド44

開建高校が目指すもう一つの姿は、

生徒が創る学校

授業も、学校生活のルールも、
しなやかに変化し続ける学校

学校を変化させていく中心は生徒であ
り、生徒と教師が一緒になって学校を協
創していくことを目指しています。

